川崎市育成会手をむすぶ親の会　幸支部

幸通信No.16

発行日　平成 29 年 11 月 1 日

平成 29 年度　第 15 回川崎市幸区社会福祉大会

9 月 27 日（水）幸市民館大ホールにて、今年度の幸区社会福祉大会が開催されました。

この大会は、社会福祉法人川崎市幸区社会福祉協議会の主催で、「幸区民と社会福祉関係者が一堂に会して、安心して暮らすことのできる地域社会づくりについて、共に考え、活動を充実させていく意を新たにするとともに、日頃より地域福祉向上に貢献されている方々の功績を称える」（開催要項より）という趣旨のもとに行われています。

第 1 部は、顕彰式典で、地域福祉活動の進展に大きく寄与された方々に、表彰状、感謝状が贈られました。今年度は、川崎市幸区社会福祉協議会会長表彰として、29 名の方々に表彰状、川崎市幸区社会福祉協議会会長感謝として、6 団体に感謝状が贈られました。今回も数多くの方々が、壇上にあがり表彰されましたが、このような地域福祉に携わる方々のおかげで、私たちの日々の暮らしもに支えられているのだと思います。

第 2 部は、記念映画「折り梅」の上映がありました。今回は認知症とその家族の葛藤と再生の物語という、人間の無限の可能性が描かれた感動作です。実話に基づいたストーリーは、高齢化社会の日本で身近な問題であることに加えて、演じるのが原田美枝子さん、吉行和子さん、加藤登紀子さんという有名な俳優陣のおかげか、たくさんの方々が来場されていました。

また、会場のロビーでは、昨年同様、交流事業として、幸区内の障がい者施設・地域作業所活動紹介の、製品の販売がありました。1 部と 2 部の間の休憩時間には、たくさんのお客さんで賑わっていて今年も盛況でした。　　（髙山　君子）

『インクルーシブデザイン』について

先日、ある会議で『統合教育』についての話題がでました。私の次男が自閉症だとわかったとき、なるべく普通の生活をさせたいと思い、統合教育をしている幼稚園を探せたらと考えていたことを思い出しました。あれから、２８年経ち『統合教育』はどうなったのだろう？という疑問が沸いてきました。例によって、インターネットで検索したところ、『インクルーシブデザイン』という言葉が目に飛び込んで来ました。

１.『ユニバーサル』と『インクルーシブデザイン』の違い

『ユニバーサルデザイン』は聞いたことがありますが、『インクルーシブデザイン』は、初めて聞く言葉でした。どういうものなのかと興味を持ったので、調べてみました。

『ユニバーサルデザイン』には７つの決まり事がありますが、『インクルーシブデザイン』には特に決まり事があるわけではなく、何かを制作したり環境を整えたりするときに、初めから様々な立場や分野の人、『社会的障壁』を感じている人（少しでも不便を感じている人）と一緒に課題を解決し、排除されてしまう人をなくすようデザインするということのようです。

つまり、『ユニバーサルデザイン』は誰にとっても使い勝手がよいことが要求されますが、『インクルーシブデザイン』は世の中の様々な人から聞き取りをし、課題を発見し、使い勝手だけでなく、誰もが「うれしい」とか「楽しい」とかいった気持ちになれるデザインをするのです。人の気持ちにまで配慮したデザインということかなと、私は思いました。

２.『インクルーシブデザイン』は、どのようにして生まれたか

『インクルーシブデザイン』がどのように生まれたかを説明する前に、『ユニバーサルデザイン』の発祥について書きたいと思います。

『ユニバーサルデザイン』は、アメリカのロナルド・メイス（ノース・カロライナ州立大学センター・フォー・ユニバーサル・デザインの所長、建築家）が提唱したのだそうです。きっかけとなったのは、1990 年にアメリカで施行された『ADA（Americans with Disabilities Act ）』という法律で障害のモデルを『社会的モデル』として捉えた法律です。けれど、車いすで移動しにくい建物にスロープをつけたり、視覚障害の人ために点字の説明をつけたりと、この法律を守っているだけでは、障害のある人の日常から全ての不便を消すことはできないと感じたメイスは、

障害のある人を特別な存在と考えず、誰もが使いやすいデザイン、『ユニバーサルデザイン』という新しい基準にたどり着いたそうです。

一方、『インクルーシブデザイン』はイギリスで生まれました。ロジャー・コールマン名誉教授（ロイヤル・カレッジ・オブ・アート 英国王立芸術大学院の名誉教授）が提唱しました。きっかけは、車いすの生活をしている友人から、自宅のキッチンのデザインを頼まれたことだそうです。コールマン名誉教授は、車いすの友人が使いやすいデザインをイメージしていたそうですが、彼女の要望は、「近所の皆さんがうらやむようなデザインにしてほしい。」というもので、デザイナーが勝手に思い描くデザインと本人の要望には差があることを痛感し、機能性を追求した「使う」という視点だけでなく、「楽しい」という気持ちをも考えてデザインすることに気づき『インクルーシブデザイン』が誕生したのだそうです。また、この『インクルーシブデザイン』も、障害のモデルが『医療的モデル』から『社会的モデル』に変わっていくのに伴い、デザインの対象となる人も、経済的に厳しい状態にある人や、インターネットを使えない人、その国の言葉が分からない人というように『社会的障壁』を感じている人全てが対象となっているそうです。

３．まとめ

『ユニバーサルデザイン』は、「このデザインのほうが使いやすい人が多いだろう」という考え方で、『インクルーシブデザイン』は、もっと人の気持ちに入り込むというような感覚があるように思いました。切り口の違いはあるものの、どちらも『社会的障壁』を感じることがないようにデザインする点では同じだと思います。

また、『インクルーシブデザイン』には、「願望」を意味する『アスピレーション』を大事にし、ビジネスとしても成り立たせるという面もあるとのことです。

さて、最初に書いた『統合教育』ですが、現在は、『インクルーシブ教育』なるものになり、「障害のあるなしよりも、一人ひとりに合わせた教育」という形になっているようです。これも、人の機能から判断した『医学的モデル』ではなく、社会にある課題を解決していく『社会的モデル』に障害のモデルが変わったからでしょう。

今回、『インクルーシブデザイン』という課題解決の方法を知って、社会が持っている可能性を広げるきっかけは、人の思いの中に潜んでいるではないかと思うようになりました。課題を感じている人の思いに寄り添うことで、課題を感じている人だけでなく、より多くの人に喜びを感じてもらえる「インクルーシブデザイン」の考え方が広まって、誰もが排除されない社会が実現するとよいなと、思います。

（仁尾　智都子）

幸のほっと❤スポット　File12 横須賀線とススキ

今年は、夏に雨が多かったり、気温も低めだったりして、いつの間にか秋になってしまったような気がします。

新川崎駅ホーム横浜寄りにて撮影

さて、日本の秋と言えば、お月見、そしてススキですね。ススキは、秋の七草のひとつで、漢字では「芒」や「薄」と書き、イネ科の植物です。派手な花が咲くわけでもなく、どちらかというと地味な植物だと思うのですが、群生して風に吹かれている姿は何とも言えない風情があります。

観光地としては、箱根の仙石原のススキが有名ですが、幸区内の横須賀線の線路沿いのススキもなかなか良いのです。私の個人的なイメージですが、南武線や京浜東北線よりも、横須賀線沿いの方がススキがたくさんあるような気がします。

特に、新川崎駅のホームの横浜寄りから小倉陸橋の先までは、線路に沿ってススキの銀色の穂が揺れていて美しいのです。

かつては新鶴見操車場跡地として、川崎横浜にかかる大きな土地があり、ススキが群生していましたが、今では再開発が進みマンションやK²タウンなどが建設されてだいぶ空き地が少なくなってしまいました。幸通信NO６の「ほっとスポットFile２」の「小倉陸橋のやぎ」で紹介した場所は広大なススキ野原でしたが、残念ながら、昨年マンション建設工事のために、ずいぶんススキが切られてしまいました。でも、去年切られた場所も盛土された所以外では、今年もまたススキが復活していて、意外にたくましいと感心しました。そういえば、昔、「ススキはセイタカアワダチソウが持つ成分（毒素）に駆逐されてしまって、そのうち絶滅してしまう」という説がありました。確かに一時期ススキの銀色が、いたるところで黄色にとってかわられていましたが、最近またススキが盛り返してきたような気がするので、ちょっと調べてみました。北米原産のセイタカアワダチソウは、生息場所がススキと同じで、高い繁殖力を持ち、しかも根に他の植物の発芽や成長を阻害する物質が含まれているため、日本古来の植物はすっかり影を潜めてしまいました。ところが、周りの植物や小動物を駆逐して独占した土地の栄養を使い尽くし、自分の毒素で自らまで被害を受けるようになったらしく近年衰退しているようです。そこに、ススキが復活して栄養の枯渇した土地に栄養を与え、毒素を消化分解して土地も回復しているみたいです。楚々として控えめだけど、ススキは意外に強靭なのですね。　　（髙山　君子）

ススキと湘南新宿ライン